

国際金融市場へのアクセス：国際決済ネットワークの歴史的構造

座長：矢後和彦（早稲田大学）

報告者：畑瀬真理子（一橋大学）

菅原歩（東北大学）

出町一恵（東京外国語大学）

本パネルは、企業等の経済主体が国際金融市場にアクセスする際にあらわれてくる問題状況について、コルレス・ネットワーク、インパクト・ローン、貿易信用等の国際決済ネットワークの視点から歴史的に接近する試みである。国内の業者が海外に販路を求める際には、海外と取引を有する銀行を介して送金・決済のネットワークに参入しようとする。こうした国際金融市場へのアクセスについて、従来の研究では、香港上海銀行のような国際銀行の支店網を通じた行内資金循環のあり方（西村閑也）、あるいは自行の支店網と海外の銀行とのコルレス・ネットワークとのトレード・オフ（ジェフリー・ジョーンズ）といった視点が提示されてきた。

ところが最近の歴史研究の進展をつうじて、この主題ははるかに複雑で、広大な視野にひろがる問題群と接続していることがあきらかになってきた。本パネルでとりあげる日本の視点に即してみると、以下のような論点があらわれる。すなわち、（１）コルレス・ネットワークの形成に際して、国内銀行が国際金融市場にアクセスしようとする際に銀行規制が立ちはだかった。ブレトンウッズ体制下の外為規制とその緩和の歴史的経過とコルレス・ネットワークの形成は、日本経済の成長・成熟と、業態別銀行規制の動きと連動していた。（２）国内業者が国際金融市場にアクセスしようとする際に、外国銀行からはインパクト・ローンが提供される時期があった。インパクト・ローンの制度は、経済発展の特定の段階に照応していた。（３）戦後の外貨不足期からブレトンウッズ崩壊を経た日本の輸出政策の変遷は、貿易信用を通じて発展途上国の累積債務問題と接続していた。

本パネルは、キャサリン・シェンクが推進してきた研究プロジェクト Global Correspondent Banking 1870-2000 に呼応しつつ、国際決済ネットワークというミクロの機構を銀行規制や外為・貿易信用などマクロの制度と突き合わせて「歴史化」することを通じて、国際金融市場へのアクセスをめぐる歴史像をより豊富化することを意図している。